

立正佼成会(学林海外修養科)における留学生への日本語教育

横浜国立大学 佐藤瑞恵

1. 本研究の意義と目的

日本国内において、いわゆる宗教教団が行ってきた日本語教育といえば、キリスト教の宣教師を対象としたものが多く、外国人の宣教師が布教対象国である日本の言語を学ぶのが常であり、これまで研究の中心となってきた。

それに対して、日本の仏教教団が、外国人を日本に招聘し、いずれは現地に帰すにも関わらず、日本語とその教えを伝え、海外布教のリーダーとして育成する例もある。

本研究の対象となる立正佼成会^{a)}(以下、佼成会)は「学林」という幹部養成機関において、外国人留学生が日本人の幹部候補生と共に寮生活をしながら、日本語教育および宗教教育を受けているが、なぜ彼らは日本へ招かれ、日本語を学ぶのか、その目的と効果はどこにあるのかを知ることは非常に興味深い。本発表では、まず佼成会の日本語教育機関の成立からの歴史的変遷を明らかにし、教団関係者への聞き取り調査と教団資料をまとめたものを示したい。

2. 先行研究

佼成会の日本語教育についての先行研究は見られないが、日本の宗教団体が行っている海外布教指導者の養成を扱った研究に、伝統仏教教団・浄土真宗本願寺と、神道系教団・天理教の例がある。浄土真宗本願寺の場合、龍谷大学が将来海外布教を志す者のために、英語により仏教知識を習得できる課程を設けており、国外では米国カリフォルニア・バークレーに仏教大学院を置き、仏教学修士課程を開設し門戸を開いている。だが、いずれも日本語教育はなされておらず、英語での教授に限られている。

また、天理教は、パリ、シンガポール、香港、ニューヨークなどの他国家間にわたって日本語教育事業を行っている。山岡(1997)では、天理教の日本語教育の国際的展開について次のような分析を行っている。

天理教は一種の社会貢献として、布教という最終目的とは直接無関係に日本語教育を行い、大きな投網をかけて、一部の熱心な生徒を対象に布教を行うという手段をとっている。布教の目的からいうと一見非効率であるが、長期的に見れば現地の信頼を得て布教にも繋がる。

山岡の調査によれば、パリの天理日本語学校は私学ではヨーロッパ最古の日本語教育機関として一定の評価を得ているということである。

日本国内では、天理教語学院がその附属機関として天理教徒の留学生の日本語教育に専心している。

校成会のケースは、純粹に、海外布教のリーダーを育てるという目的のために、世界から信仰心の強い留学生を集め、少数精鋭で日本語教育と宗教教育を日本でのみ行っているという点で上述の教団と異にし、信仰と日本語教育を巧みに融合させた教育プログラムを構築している。

3. 学林の概観

①学林 本科

将来の校成会幹部養成を目的とした大学院的教育機関を意図し、1964年(昭和39)に創設された。対象は30歳以下の日本人青年で修養年限は2年8ヶ月(4月入学 3年目の11月卒業)。大学又は高等教育機関を卒業した熱心な信仰者を年間6-8名間受け入れている。仲間と衣食住を共にしながら、仏法を研鑽することで、幹部としてふさわしい人格を作り上げる。現在まで415名(2018年現在)の学生を輩出している。

②学林 海外修養科

海外布教の指導者を養成する目的で、1994年(平成6)に創設された。28歳以下の外国人青年が対象で修養年限は2年(4月入学)。本科生と共に寮に寄宿しながら、初年度は主に日本語学校で日本語教育、次年度は学林内で日本語教育と、校成会の基本的な教義や儀礼儀式等を学び、実地研修として教会での布教体験も行う。卒林後は帰国し、在家として国で1-2年程度布教活動に従事することが義務付けられている。ただし、1年目に日本語能力試験N3を取得するか、その程度の能力があると認められなければ1年間で帰国しなければならない。これまでに105名の留学生を輩出し、出身国は韓国、タイ、米国、台湾、ブラジル、バングラデシュ、スリランカ、中国、モンゴル、カンボジア、インド、ロシアの12カ国に渡る。

4. 学林本科・海外修養科の歴史

学林海外修養科の歴史を知るには、学林本科の発展、及び教団の国際布教の流れも同時に見ていく必要がある。

海外への教線発展の第一歩は、第二次世界戦後、アメリカ人妻の日本人女性達がアメリカへ渡り活動をはじめたことに起因する。現在も校成会是他宗教との対話や友好を特に重視している教団であるが、当時も海外ではその国の宗教を尊重し、新たな会員の獲得は目指さず、移住した日系人を中心とした小規模な宗教活動を行っていたということである。

1958年(昭和33)

庭野開祖が初の海外視察を実施。ブラジルをはじめとした南米諸国、およびアメリカのロサンゼルス、サンフランシスコ、ハワイ等を訪れ、在住の会員と会い、彼らを励ます。

1959年(昭和34)

ハワイとロサンゼルスに初めて支部が置かれる。日本から支部長が派遣され、海外組織が始まった。

1964年(昭和39)1月

庭野開祖が「仏教大学院的な性格を持った教育機関の設置」(現在の学林本科)について言及。

1964年(昭和39)4月

学林発足式、及び1期生3名の入林式。(5月の教団「大聖堂」の落成式に合わせて。)

1967年(昭和42)

学制が改革され、当初の2年コースから3年コース(正確には2年8ヶ月間)に変更。専門科2年コース、研究科1～5年コースも生まれる。学林「本科」という呼称が用いられるようになり、布教実習も始まった。

1974年(昭和49)

女性の教会幹部生を育てるため、学林「女子専修科」が発足。

1975年(昭和50)

大学生を対象にした学林「予科」(現 光澍)も発足。この頃に国際布教の第一歩としての外国語翻訳事業などが始まった。

1980年頃

日本で労働に従事していた南アジア出身の外国人が佼成会に入会し、帰国後に現地で教えを広めるといふ動きがあり、これによって組織的な国際布教の必要性が検討されるようになった。

1994年(平成6)

学林国際コース、現在の学林海外修養科が創設される。

創設の直接的な働きかけは佼成会元理事長 酒井教雄氏によるものである。当初の海外修養科は海外拠点の日本人教会長と現地教徒を繋ぐ役割を意図したもので、通訳育成の意味合いが強かった。

2004年(平成16)

2代目庭野会長が「世界布教」という言葉を初めて使用。教団内部に国際布教を進める意識が形成された。南アジア教会(バングラデシュ)も設立され、学林海外修養科の内部でも、卒林後に日本で佼成会職員として勤務を希望する留学生が生まれるようになった。

2006年(平成18)

庭野開祖の生誕100年を記念する大きな節目の年。学林を管轄する現「国際伝道部」が「国際伝道課」より昇格。「国際布教」が全面的に打ち出される。

2009年(平成21)

学林本科と海外修養科が青梅市にある「青梅錬成道場」に移転。これまでより信仰面、日本語習得の面共に、成果のある良い方向へ変化した。この年に「特別生制度」(後述)が設けられた。

2013年(平成25)

「学林国際コース」から現在の「学林海外修養科」へ呼称が変更された。

5. 海外修養生の選抜

毎年1回募集を行う。主要な応募条件は、入林時に28歳以下であること、高等教育を受けており、佼成会が規定している信仰上の基準を満たしていることである。これに加え、母国で所属する教会長の推薦が必要で、信仰の面、学業の面等からも総合的に判断される。これらの条件を満たした者が1次試験通過となり、2次試験へ進むことができる。2次試験に臨むにあたっては別途課題が与えられ、課題の実践期間を経て9月に2次試験(オンライン面接)、その後最終決定される。試験に合格した者は、さらに入林までの約半年間、漢字と聴解課題が与えられ、1週間ごとにメール添付にて課題を提出することが必須となっている。

近年、バングラデシュ出身の入林希望者が非常に増え、修養科全体で5名程度の募集のところ、バングラデシュから10名近くが応募をする状況が続いている。このような地域では、はじめに自分が所属する教会での選抜を受けてから、1次試験への応募が可能になるということである。

6. 特別生制度

海外修養科を修了した留学生のうち、本科へ進学を希望する者が利用できる制度である。この制度を希望する留学生は、まず日本人志願者と同様に本科試験を受験、合格した者は佼成会本部でインターンシップをしながら日本語学校で日本語を学び、日本語能力試験N1取得を条件に、本科へ入林できる仕組みとなっている。ただし、2010年には海外修養科コースを経ずに現地から直接本科へ入林した留学生(モンゴル・ウランバートル)1名、2011年には修養科の後「特別生制度」を利用せずに本科へ入林した留学生(モンゴル・ウランバートル)1名、2012年にも1名(韓国)も生まれた。「特別生制度」を利用し本科へ進んだ留学生は現在まで2名で2012年に1名(モンゴル・ウランバートル)、2015年に1名(バングラデシュ)である。

7. 海外修養科の教育

海外修養科の教育内容について見ていきたい。毎年、教団の動きや留学生のレベル、ニーズに合わせ、流動的に内容が決まっていく部分も多いということだが、日本語教育と宗教的教育を組みわせ、非常によく構築されている印象を受ける。

教育目標は次の通りである。

初年度「日本語の基礎を習得し、日本語で本会の教えを学ぶ」

次年度 前期「佼成会用語がわかり、釈尊・本会の教えの基礎および概要を理解し、身につける」

後期「釈尊・本会の教えを自ら実践し、教えを人に伝えることができる」

まず日本語の習得からはじまり、佼成会の教えを正しく理解する段階を経て、最終的には布教できるように育てていこうとするプロセスが伺える。

学林の教育体系は次の9項目である。

1.語学 2.教義 3.教養 4.研究 5.演習 6.実習 7.寮生活 8.青梅プログラム 9.錬成

この教育体系の中に「寮生活」が組み込まれており、学林生にとって寮での共同生活が大きな意味を持つことがわかる。以下、特筆すべき項目の内容について言及する。

1. 語学

初年度は日本語教育が最も重点を置かれ、日本語能力試験 N3 を取得するのが最重要課題である。午前中は日本語学校で海外修養科生だけの少人数クラス(45 分×2 コマ)、午後は一般の留学生クラス(45 分×4コマ)にて授業を受ける。午前中のクラスは学林修養科生のクラスではあるものの、校成会に関する内容の講義ではなく、日本語能力試験対策の授業が実施されている。

通常クラスの主教材は『学ぼう 日本語』シリーズ (専門教育出版)で、クラスは習熟度別である。

日本語学校は 1 年で卒業するため、次年度は学林内に講師を招いて、日本語教育が行われる。(週 1 回 3 時間程度、及び日本語能力試験前の補講のみ。) これらに加え、書道の時間も週 1 回設けられている。

2. 教義

1 年生は日本語力の関係から教義の授業はほとんどないが、月に 1 回程度、学林において庭野開祖の教えについて学ぶ授業がある。来日後 3 ヶ月程度の間は、修養科 2 年生が授業中に学林講師の授業を母語または媒介語で通訳する。3 ヶ月目以降は、段階的に日本語で講義を行うようになる。後期になると、校成会の経典の比較的容易な部分について不定期ではあるが講義も実施されている。

2 年生より、学林内で教義の授業が本格的に始まる。講義は全て日本語で、具体的には「校成会用語」、「儀礼・儀式・作法」、「本尊」、「仏教・教団行事」、「基本信行」^{b)}等についての授業や、「開祖伝」「法華経」等まで、様々である。「開祖伝」については開祖著の自伝『この道』が使用され、担当講師が内容の解説をしながら、部分的に学んでいるようである。また「法華経」は、まんがで説明されたテキストによって、わかりやすく解説されているだけでなく、学んだことを実生活に当てはめて取り組むように実践的な指導も受けている。これらの授業を通して、将来的に母国で、校成会の教義の要点を説明し、自分の実体験も交えながら布教できるよう指導されていく。

4. 研究

卒林時に学林生活の集大成として卒林レポートを提出することになっている。これまでのレポートには次のようなものがある。

平成 28 年度：「バングラデシュにおける家庭教育の役割と女性たちの活躍」バングラデシュ

平成 29 年度：「〇×からみんな〇へ」スリランカ、「プノンペン法座所の活動について考える」カンボジア、「おかげさま」バングラデシュ

平成 30 年度：「感謝とは」バングラデシュ、「無我の実践」インド、

「スリランカの成り立ちと宗教の歴史」スリランカ

5. 演習

校成会は「法座」という修行を非常に大切にしている。法座は自己の感情や問題を包み隠さず他人の前で吐露し、真剣に聴き合い、学び合う修行である。同時に、校成会の信仰によって得た幸福や喜びを法座のメンバーと共有することも求められる。法座は週 1～2 回程度行われ、1 年生は初めは媒介語を使ったり、通訳の先輩を介して自分の悩みや感情などについて話をしていく。日本語が習得されるに従い、周りのサポートを借りながら、徐々に日本語で話せるようになっていく。

2 年生になると、法座主(法座の司会進行役)を務め、他の人の話を客観的に聞き、教義に照らし合わせて解決に導く役割を担うようになり、積極的に 1 年生の面倒を見ることも大切な修行要素の一つになっている。

「ご供養」という經典の読誦も日本語で行う。海外の拠点にはそれぞれ外国語經典が準備されているものの、国によってその使用の有無が異なるため、入林後にはじめて日本語で読誦しなければならないケースも見られる。はじめは先輩や本科生の誦える音を聞きながら、音とひらがなを追って、徐々に經典を日本語で唱えられるように練習していく。

6. 実習

1 年生は夏に 1 週間程度、全員が同じ教会(西多摩教会)に赴き、実習を行う。日本の教会の修行の様子や雰囲気、1 日の流れを体感する。教会の当番修行や、基本信行や教会行事などにも参加する。教会での生活を体験することで、日本の風土や文化の理解を深めることも 1 つの狙いである。

2 年生は年間 2 回の布教実習を実施する。一人ずつ別々の教会にて、1 回目は 25 日程度、2 回目は 40 日程度の実習で、教会長に従いながらご供養を行ったり、基本信行を実践することが中心となる。教会の運営、清掃奉仕、お給仕をこなすことが期待される。実習中に一般信者と修行を共にすることで、布教リーダーとしての自覚を深めていく。

7. 寮生活

寮の運営は当番制で、「食事」「日直」「会計」「法座」などがある。本科生と修養科生は区別されず、班に分かれ交代で当番を行う。「食事」は買い出しから調理、「日直」は朝礼や終礼の実施、最終的な点検、「会計」は国際伝道部から得た経費を計算し、寮運営をする役目である。「法座」は週 1-2 回行われる法座がスムーズに進むように進行する。

寮生活のルールについては、先輩から徹底的に指導を受けることもあるというが、先輩たちは皆非常に面倒見がよく、特に修養科 1 年生は日本語学校で習ったことを先輩たちに使ってみたり、授業で聞けなかった内容を質問している姿がよく見られるということである。

1 日のスケジュールも、勉強と修行と寮生活で非常にタイトであることから、来日したばかりの留学生にとっては非常にストレスが強く、この不満を法座で話す留学生が多く見られるという。しかし寮生活は学林生に葛藤を与えるためにあえて設けられたものであり、この葛藤により自らを見つめ、信仰を深めていく。

8. 今後の課題

今後は、校成会の「法座」での修養科生の発言や内面の変化に着目し、参与観察やインタビューを通して研究を進めていく計画である。法座は校成会の主要な修行であり、自己の内面を包み隠さずに話す必要があることから、学林修養科生の本音が伺える貴重な機会であると考えられる。学林職員の話によれば、はじめはたどたどしい日本語で、来日直後のストレスや不安、異文化から生じた様々な不満を述べる留学生が多いが、学林生活が進むにつれ、個人的な悩みや家族の問題、自分のバックグラウンド、学林生活を通して気づいた自らの弱さなど、より自己の奥へ進んで吐露するようになるという。そしてそれを可能にするのは第一に日本語力の向上があつてのことだとのことである。

法座での発話内容は、海外修養科生にのみ当てはまるものではなく、来日した留学生が皆、対峙するであろう異文化間の諸問題を明らかにし、受け入れ側の機関がどのようなことに配慮すればより円滑に文化差を埋められるのかという提案も可能にすると考えられる。また、学林生活が長くなるに従い、発話の質が変化するという関係者の観察から、留学生は異文化に慣れていく過程で、語学力や異文化間ギャップに支配される段階から、より俯瞰的に個人の問題を捉えられるようになっていくプロセスを明らかにできるのではないかと考えている。以上のような関心を元に、今後研究を進めていきたい。

注

a) 立正校成会

日本の新宗教に属する在家仏教教団。

開祖 庭野日敬(にわのにつきょう)。現会長 庭野日鑛(にわの にちこう)。

設立 1938 年(昭和 13)。2018 年で 80 年目にあたる。

本部は東京都杉並区。会員世帯数 国内約 115 万世帯 238 教会、海外 20 カ国 65 拠点。

b) 基本信行

ご供養・導き・手取り・法座、ご法の習学の 3 つを指す。

【参考文献】

庭野 日敬(1999)『この道 一仏乗の世界をめざして』 校成出版社

山岡 政紀(1997) 天理教における日本語教育の国際的展開 『比較文化研究 15』 創価大学紀要

『一個人 2013 年 9 月号』(2013)「立正校成会の信仰と活動」 pp.66-74, KK ベストセラーズ

『教化研究 No.19』(2008)「他教団における海外開教の現状と開教使(師)養成」, 浄土宗総合研究所

『大樹 学林創設 50 周年記念誌』 (2014) 立正校成会学林

「学林の歴史」学林立正校成会公式ホームページ, <http://www.gakurin.jp/>